

様式1

令和6年度 学校評価表

学校教育目標		「確かな学力と豊かな心を持ち、たくましく生きる児童の育成」												
a ミッション		コミュニティ・スクールを基盤とした「向東の対話」を活かした深い学びの創造				a ビジョン		「学校と地域が協働し、子供の未来を拓く学校」				尾道市立向東小学校		
評価計画					自己評価					学校関係者評価		改善計画		
b 中期経営目標	c 短期経営目標	d 目標達成のための方策	e 評価指標	f 目標値	7月	1月	h 達成度	i 評価	j 結果と課題の説明	k 二次評価			l コメント	m 改善案
					g 達成値	g 達成値				イ	ロ	ハ		
学力の向上	主体的に学び続ける児童の育成	対話的な授業づくりによる学力の向上	(1) 授業改善 ①思考力、活用力の育成を目指した対話的な授業づくり ②課題や実態に応じた手立ての工夫 ③研究授業の実施 (2) 言葉の力の育成 ①書く力の育成 ・向東小テストを活用した記述問題の指導 ・日記、作文の指導 ②読む力の育成 ・意味調べ、音読の充実 ・読書活動の推進	○対話に関する児童アンケート『授業では、「むかいひがし」を使って友達と話し合うなどして、自分の考えを深めたり、広げたりしている。』という項目で肯定的な評価の児童と教職員の割合の平均 単元末テストにおける平均正答率(%) 1年 国85 算85 2年 国85 算85 3年 国85 算85 4年 国80 算80 5年 国80 算80 6年 国80 算80	90%	75.4%	77.6%	86.2%	B	【結果】7月と比較して1月は2.2P上昇したが、目標の90%には到達できなかった。 【課題】9月に児童と教職員で目指す姿を話し合い、児童の発達段階に応じたためあてを教室に掲示した。評価の視点が明確になったことで、主体的に取り組める児童が増えたり、教職員も授業の中で対話の深まりを感じられるようになった。	7		・児童と教職員で話し合い、めあてを掲示することで日常的に目指す自決や取り組み方・対話が深まっていると感じる。 ・新年度は改善策で得られた実績を活かして、年度当初より評価指標が達成できるように取り組んでいただければと思います。 ・目標を明確にし、指示することで、自にする機会も増え、意識するきっかけになり達成値の上昇につながったのではないだろうか ・目指す姿を明確にし、前段から見えるようにすることは大切だと思います。目標の達成に向けて自己肯定感を養うことができるとともに、目標達成に向けたやる気の創造につながると感じます。 ・目標値には到達していませんでしたが、手立てを工夫をしたり、教職員で努力したりする姿は評価できると思います。 ・これからも「むかいひがし」を使い、対話を広げてほしいです。 ・家庭においても子供と向き合う努力をしています。	教員の評価を児童と同じではなく、授業改善を視点としたものにする ・「資料との対話」として校内で統一して取り組めることを探り、学力向上につなげていく。 ・少したる変化でも褒めるように意識して、教育活動を行っていく。
						国語科 84.5点 算数科 83.9点	国語科 84.6点 算数科 82.6点	国語科 102.5 算数科 100%	A	【結果】1月までの単元末テストでは、7月と比較して国語科は0.1点上昇し、算数科は1.3点下がった。 【課題】国語科では、文章読解問題の失点が目立っている。語彙力強化を図ってきたが、文章の内容理解を深める対話が十分ではなかったと考えられる。算数科では、文章題や思考を問う問題に誤答が見られる。	7	・各教科に共通する力として、読解力をつけるために学校だけでなく家庭生活の中で読書をする機会を増やすために共に考えていきたい。 ・読解力は、文章を読むだけでなく人のコミュニケーションの中でも必要な力だと思うので、読書力、書く力、読む力全ての力が必要なんだと思う。 ・児童同士で必要となる読み解くポイントや理解させる必要があると思います。大人の説明より子供同士の対話の中から理解が深まることもあり、思わぬ到達しているように感じられました。全国学力調査の結果は、このように全体の傾向を把握するために活用する程度で良いかと思いました。 ・書く力、読む力、伝える力はこれらが必要になるので身につけてほしいです。 ・日記の宿題はよいと思います。	授業の中で思考の過程を言葉で説明したり図や表を使って数量関係を理解しやすくするなど、学年の段階に沿った指導を検討していく。引き続き対話を充実させ、自分の言葉で表現できる力を育てていく。	
						学力調査における平均正答率 12月の標準学力調査における平均正答率(%)	全国平均以上	平均正答率 82.5点以上						
生徒指導の充実	心身ともに成長しようとする児童の育成	共感的人間関係の中で健康な心と体を育てる	(1) 自己肯定感を感じる学校集団づくり ①仲間作りを意識した構成的グループエンカウンターとソーシャルスキルトレーニングの実施 ②児童の不安や悩みを早期発見する体制の充実 ③仲間との関わりを生み出す機会の確保 (2) 自律できる児童の育成 ①各学級における生活目標達成の手立てを共有 ②掃除や係活動の充実 (3) 異学年での運動遊びが楽しいと思える機会の創出 ①体育委員会・児童会の運動遊びの企画・実施 ②教員主催の体力向上を意識させる運動遊び企画・実施 ③外遊び週間の設定 ④集団遊びができる器具の整備 ⑤校舎内外でもできる集団遊びの紹介 ⑥職員研修	・児童アンケート「友達と関わって学習したり活動したりするのは楽しい」の項目で肯定的に答えた児童の割合 ・児童アンケート「学校は楽しい」の項目で肯定的に答えた児童の割合	96%	95.6%	95.3%	B	【結果】「友達と関わって学習したり活動したりするのは楽しい」の項目は、7月と比較して1月は0.3P下がり、目標の96%には到達できなかった。「学校は楽しい」の項目は、94.3%で目標を達成することができた。 【課題】友達との関わりにおいて、各学級でグループエンカウンターを用いた仲間づくりや対話を取り入れた授業づくりに取り組み児童同士が関わり合う活動を意識的に仕組んできたが、話すことに苦手意識を感じていた、自己肯定感の低さから自分を肯定的に評価できていないと考えられる。	7	・教師は子どもの力をききだし、互いに高めあう学習づくりを運営していただきたい。 ・体験不足が顕著しているように感じますので、さまざまな体験を通して、自己肯定感を育む機会を得てもらえればと思います。 ・無理無理ではなく、その場にいる子どもたちが楽しんでいるかどうかと思うので、感じているか子どもの思いを大事にしてほしいと思う。 ・目標達成に向けて継続して行動させ少しの変化をほめる、わからないことを分らないと言えぬ雰囲気を作ること大切だと考えます。そのためにグループエンカウンターを活用していただければと思います。 ・自己肯定感を高める学校集団づくりが学びの根幹となるので、ぜひ継続して取り組んでほしいです。 ・仲間との関わりの中から自己肯定感をあげ、学校全体が「楽しい」学校を目指してほしい。 ・学校の何が楽しいのかに子供たちが笑顔になるのか。これらもずっと課題になるかと思っています。	グループエンカウンターや対話を大切にした授業づくりを引き続き取り組み、それに加えて友達と積極的に関わることをできるよう活動を生かすことが必要。		
					88%	84.9%	84.3%	A	【結果】7月と比較して1月は0.6P下がり、目標の88%には到達できなかった。 【課題】代表委員会で毎月の児童会目標の確認をしているが、全児童への目標の浸透率が低いことが原因として挙げられる。そのため、各学級に児童会目標を掲示できるようにし、少しずつ意識は上昇しつつある。	7	・様々な、種別別に学校を訪問することがあり、その際の児童の様子をみていけると楽しく、その場に居る児童の成長を感じることができている。児童自身も学年に合わせた理解できているのかの検証をすることで、学年の成長がわかるのではないかと、必ずしも理解し、自分自身で考えられるようになったり、目標に対する意識を高め、達成する機会も増えようと思えます。 ・目標を自ら設定することで、取り組む意欲も高まる。そして、振り返りをする中で考えられる。次の目標に向けて、児童自身で目標を設定し、達成に向けて取り組む。これによって、児童の成長を促すことができるのではないか。もう少しすると児童自身で目標を設定し、達成する機会も増えるのではないか。	目標を意識した生活ができるよう、振り返りも充実させていく必要がある。振り返りの視点を明確にした振り返りカードの実施を行う。		
					90%	91.5%	89.6%	B	【結果】7月と比較して、1月は1.9P減少したが、目標の90%には到達することができなかった。 【課題】2学期以降も体育委員会や児童会が主体となって、異学年交流ができる運動遊びの機会を企画・実施することができた。また、クラスでも休憩時間にレクリエーションを行い、男女関係なく遊ぶ様子がよく見られた。季節によっては、外遊びをする児童が減る傾向にあり、継続して90%を達成できていない。	7	・高学年は大変だと思いますが、自分たちが取り組んでいることは「次につながっていく」という自信をもって活動してほしいと思います。 ・さまざまな機会創出の工夫が考えられており、今後も保護者や地域の協力を得ることを含めて、機会の創出だけで留まらず、成果を得ることが出来るよう取り組んで欲しい。 ・企画があると自然と子どもたちを導くことができるので、今後も続けてほしいと思う。掃除の縦割り班を運動遊びのグループとして使ってみるはどうだろうか ・異学年交流の指標について遊びを指標にした場合、苦手な児童もいるので90%が達成の限界とも考えられます。次年度以降は評価指標を見直すことも検討いただければと思います。 ・異学年交流は家庭では難しいので、レクリエーションを通じてルールや関わりを学んでほしい。 ・異学年交流は、続けてほしい。	季節によっては、外遊びをする児童が減る傾向にあるため、校舎内でも安全に、友達と楽しく関わる遊び等を紹介するなどし、今後も、性別や学年に関係なく遊べるような機会を設定するようにしたい。また、縦割り班での活動を充実させ、子供同士の縦のつながりを増やし、深められるようにしていきたい。		
信頼される学校づくり	地域と共に育つ児童の育成	学校と地域の協働の向上	(1) 地域の特色を生かした授業や地域とつながる授業の実施 ①各学年が設定した学びの場(生活科・総合的な学習の時間等) ②地域へ出かけての学習 ③ゲストティーチャーを招聘しての授業 ④挨拶を通して地域への気持ちを伝える (2) 学校の取組に係る保護者・地域への発信 ①学校便り・HP ②CS便り ③学級懇談会・入学説明会等	○児童アンケート「地域が大好き」と答える児童の割合 ○児童アンケート「地域のために活動した」と答える児童の割合 ○児童アンケート「向東小学校の児童は、挨拶ができる」と答える保護者・地域の方の割合。	85%	93.0%	93.6%	A	【結果】7月末と比較し、12月末には地域が大好きは、0.6ポイント、地域のために活動したは、3.3ポイント上昇した。 ・挨拶については、5.8ポイントのマイナスとなった。 【課題】地域のことが好きな児童が多く地域のために活動したと答える児童12月末時点で向上したが、まだ約13%の児童が、地域のために活動できていないと答えているので、地域とのかわりを継続して行っていく。 ・「挨拶」をする習慣をつけられるようにしていくとともに保護者にも啓発していく。	7	・挨拶をするだけでなく、人を元気にすることができるといえる認識を子どもたちにもってほしい。 ・地域の協力を得て、授業実施に留まらず、熱い関係づくりをより積極的に推進し、児童が何とも思える。また、地域の人が対話を持ち寄り、関係づくりを進めて欲しい。 ・地域の人が子どもと学校に入っていくことで、お互いに刺激になり、相乗効果が期待できると思う。子どもたち自身も地域の「員」としての自覚が芽生えてくるのではないだろうか。 ・挨拶については、校内、校外を問わず挨拶全体で取り組むことが必要だと考えます。児童も挨拶して挨拶が返ってこない挨拶ができていないと、地域の協力を得ながら取り組んでみてはいかがでしょうか。 ・地域のことが好きといえる児童が多いのびつくりしました。ぜひ、いろいろな活動を継続してほしいです。 ・ゲストティーチャーや地域の方々の授業は、地域の方やボランティアから学ぶことがたくさんあり、生徒の財産となっています。是非、進んで続けていただきたい。 ・学校にたくさんの方々の地域の方や家族の方々が来ることによって子供たちを見てもらっている、守っていると感じていると思う。	・挨拶ができる児童の育成には、学校だけでなく、家庭や地域の力も必要不可欠となる。挨拶がコミュニケーションの基本であることを発信しながら、学校でも挨拶が「当たり前」なる取組を進めていく。		
					90%	94.3%	94.6%	A	【結果】7月末と比較し、12月末には積極的に活用している0.3ポイント上昇した。 ・情報発信は、0.8ポイント上昇した。 【課題】地域の方々の協力を得ながら、様々な取組を行うことができた。今後コミュニケーションと連携しながら、積極的に取組を進めていく。 ・情報発信については、情報管理に気を付けながら取組を進めていく。	7	・保護者アンケートの声を、地域の方に伝えていく工夫を共に考えていきたい。 ・情報発信はタイムリーに、丁寧に発信されているように思います。全学年で切磋琢磨しながら進めていただければと思います。 ・情報発信は、0.8ポイント上昇した。 ・情報発信は、0.8ポイント上昇した。 ・情報発信については、様々な活動を知り、家庭内での会話にもつながると思っています。引き続き続けてほしいと思う。 ・情報発信については、学校サイトとしての発信は十分できていると感じます。発信する側の評価指標と受信側の評価指標を用いて新たな課題発見を図ってほしいか、多様な価値観が存在する中、これらも家庭との連携は非常に重要になってくると思います。 ・学校から地域への発信はともわたりやすい学校だから信頼へ繋がっていると思います。 ・子供も地域の顔の顔を覚え、会うことが楽しみとなってほしいと思う。	・地域人材の積極的な活用を今後も進め、よりたくさんの方に子ども達の成長に関わる組織体制を整えていく。 ・情報発信に関しては、必要な情報を精選しながら取組を進めていく。		

【自己評価 評価】
 A: 100≦(目標達成)
 B: 80≦(ほぼ達成)<100
 C: 60≦(もう少し)<80
 D: (できていない)<60

【外部評価】 イ: 自己評価は適正である。ロ: 自己評価は適正でない。ハ: わからない。